2 月 26 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　4：　1－13

「主を試してはならない」

モーセはイスラエルの人々に「神を試してはならない」と言います(「あなたたちがマサにいたときにしたように、あなたたちの神、主を試してはならない。」申命記 6:16)。ここでいう「試す」とは、「自分の思い通りに相手を動かそうとする」ことです。小さな子どもが「おもちゃを買ってくれなければ、泣くぞ」と大人に向かって言うようなこと。ある意味でそれは、相手の愛情を確認しようとする行動でもあります。「こちらがここまで言っている(している)のだから、あなたもそれなりの誠意を見せてほしい」というのは、大人になっても抱く感情の一つでしょう。

この時、モーセの頭にあったのは、荒れ野を旅していた時のことでした(「彼は、その場所をマサ(試し)とメリバ(争い)と名付けた。……『果たして、主は我々の間におられるのかどうか』と言って、……主を試したからである。」出エジプト記 17:17)。渇きを覚えた人々はモーセに詰め寄ります。「どうしてこんな状況になったのか。お前の言う通りエジプトから出たからではないか。どう責任を取るのか」と(出エジプト記 17:2-3)。

そこで、モーセが神に願い、岩を打つと水が出て渇きは癒されました。もちろん、人々は「奇跡だ」と喜んだのですが、実はこれが原因となって、モーセは約束の地に入ることが許されなかったのです(民数記 20:12)。結果的に「神を試した」からでした。

一方、イエスを試しているのは悪魔です。その誘惑は巧妙です。イエスが聖書を引用して、「と書いている」と言うと、今度はその聖書の言葉を用いて、さらに誘惑を繰り返すのです。「聖書にこう書かれているのだから、それを選んで何が悪いのか」と。「それを神は許しておられるのでは？」と、人間の奥底にある「自分さえ良ければ」という気持ちを揺さぶってきます。

「イエスは、『「あなたの神である主を試してはならない」と言われている』とお答えになった」(ルカによる福音書 4:12)。もちろんこれは、禁止というより、「試す必要などない」ということでしょう。神は全てをご存じなのだから、わざわざ愛しているかどうかの確認など必要ないのはわかりきっていることです。なぜなら、人間の目から見て「神は共におられる」時にだけ、神は共におられるのではありません。どのような状況に置かれようとも、神は決して私たちを見放すことはありません。奇跡をもって、私たちを救い出されます。

ここでふと思います。イエスは神のことをよくご存じなのだから、悪魔の誘惑を無視してもよかったはずなのではないか、と。けれどもこの場面、イエスはわざわざ悪魔に反論されています。聖書の言葉を用いて、しかも、声に出して反論されています。それは「信じて義とされ、口に出して救われる」(ローマの信徒への手紙 10:10)ためでした。

「沈黙は金、雄弁は銀」と言われ、「言わなくてもわかっている」ことの方がより良いとされる社会にあって、信仰を声に出して告白することは面倒に思えます。加えて、波風を立てずに穏やかに過ごしたいと願っていればなおさらそう思うのも仕方ないことのように思えます。

しかし、誘惑に打ち勝つにはこの「口で公に言い表わす」ことが大切なのではないでしょうか(「神に向かってわたしの口は声をあげ／わたしは舌をもってあがめます。」詩編 66:17)。

私たちの社会は今もなお、神の平和からは程遠いところにあります。70 数年前のあの戦争で学んだはずの人々が、また「自分さえ良ければ」と嘯いています。

「神は本当に我々と共におられるのか」と思う今こそ、声を大にして神への思いを言葉にしてみませんか。

「主を試してはならない。」

神を試す必要などありません。自分の信仰をこそ再確認する時としましょう。